

## 徒然なるままに...9 - 全小社研東京大会より

10月31日、11月1日に、東京都内の各会場で、「第51回全国小学校社会科研究協議会研究大会 東京大会」が行われました。久々の新幹線に揺られ(2時間半以上じっとしていることが苦手なので、専ら飛行機なんです)、いざ東京へ。街は、2020年のオリンピック招致への祝いとイルミネーションの点灯や新ワインの試飲会などの早々のクリスマス色に色づいていました。



### 第1日目 浅草公会堂

#### 1 全体会

##### (1) 大会主題提案

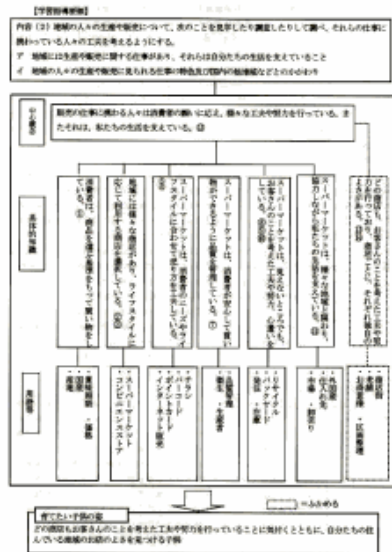
大会主題 よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う社会科教育  
-自ら調べ・考え・表現しながら社会認識を深める学習を通して-

本研究は、政治・社会への無関心、社会貢献や社会進出への意識の低下と無責任化という現代の子どもの持つ課題を克服するために、社会へのかかわり方を考える社会科学習を展開することを目指しています。

この研究において、特徴的な試みとして、次の2点が挙げられます。

一つ目は、知識の構造図をつくり、知識の構造と育てたい子どもの姿を明確にする点です。(〈図1〉)单元ごとに、習得すべき知識を「中心概念」とそれを支える「具体的知識」、さらに下位にある「事実や用語」と、構造的に整理することにより、社会認識のために習得すべき知識を明確化されています。さらに、社会参画への意識を高めた子どもの姿が具体的に設定されています。これは、教職経験5年未満の教師が半分を占める東京都の学校の実態に対応することにもなっています。

二つ目は、学習過程として、「つかむ」「調べる」「まとめる」の後に、「ふかめる」の段階を設定し、社会認識を深めることをねらったものと社会参画への意欲を高めるものに類型化している点です。



〈図1:知識の構造図(「わたしたちのくらしと商店」)〉

第4学年「ごみのしまつ」では、ごみ処理の仕組みや分別収集の意味を学習した後、分別されていないごみが収集されないことから、「ごみを適切に処理するためには、どうすればよいか。」と問い、一人一人がルールを守り協力することが必要だというごみ処理についての認識をさらに深める学習が考えられます。

第5学年「自然災害の防止」では、私たちは、自然災害から、行政をはじめ、関係諸機関の働き(公助・共助)によって守られていることを学習した後、公助や共助だけでは限界がある例や自助が機能した例を示し、自然災害から守るために自分たちにできることを考える学習が考えられます。



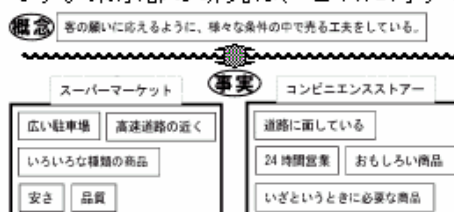
澤井陽介先生

このように、問いをつないで追究を進め、社会へのかかわり方を考える学習過程を目指しているといえるでしょう。

(2) 指導講評－文部科学省教科調査官 澤井 陽介 先生

社会科は、発足以来、問題解決(的)な学習と系統的な理解学習の二局で揺れてきました。(そもそも、問題解決は、方法論、系統性は、内容構成論なので、対立させられないので

すが。)しかし、「理解」を現在の社会の仕組みや特色とその意味を考え、表現する学習、「問題解決」をこれからのよりよい社会を考える学習ととらえると、これらは、二律背反であり、車の両輪のように機能させる必要があるのです。東京都の研究は、これに対する一つの示唆となると考えられます。



個別の具体的な事実からいえることとして概念・法則を見出すと同時に、それらの概念・法則を個別の事実から具体的に説明する「理解」を展開するためには、知識の構造図が手掛かりとなります。

商店の学習では、〈図2〉のように、スーパーマ(図2:「わたしたちの暮らしと商店」における内容の構造)ーケットやコンビニエンスストアの具体的な戦略から、商店は、客の願いに応えるための工夫をしていることを見出すと同時に、商店の工夫について、それぞれの商店の戦略を例に説明する授業がイメージできるでしょう。

今の社会を分かった上で、これからの社会をどうすればいいのかと「問題解決」することができます。この学習を展開するのが、「ふかめる」の段階の社会認識の深化と社会参画への意識付けの授業です。「理解」にとどまらず、新たな事実に基づいて、子どもを現状や課題に引き寄せたり、克服策や新たな社会を創造させたりすることによって、社会の創造に参画する子どもが育成できるのだと考えられます。

2 記念講演「大河ドラマにみる歴史と人間の生き方」 作家・脚本家 田淵久美子 先生

NHK大河ドラマ「篤姫」、「江～姫たちの戦国」をはじめ、多くの小説や脚本を手掛けてこられた田淵久美子さんのトークでした。

子どもの頃、文章を書くことが唯一大人から褒められることだった一方、ご本人にとっては、苦手だったのだそうです。今考えると、自分への要求が高いがために、納得のできるものを書くのには、労力が必要だったからではないかと。得意だからといって、大人が押し付けてしまうと、本人は、へきへきしてしまうこともあるし、苦手だからといって、不得手とは限らないということなのですね。



田淵 久美子さん

田淵さんは、歴史・社会を人の生き方に着目し、人の営みをドラマとして、私たちに発信されています。「篤姫」は、成り上がった女性の姿をストーリーとしました。いったん決めたことは、何があってもブレることなく、覚悟を決めて行動する、まず、愛をもって接するという篤姫の生きざまを今の女性へのメッセージとして描こうとしました。

社会の仕組みや営みの根底には、人間がいて、そこで、生きています。社会をどう創っていくかは、人の生き方(の選択)にかかっています。人を通した社会科学習への示唆をいただくことができました。

## 第2日目 第2会場 江東区立明治小学校

### 1 研究主題とその内容

研究主題 よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う社会科教育  
－思考力・判断力・表現力を育てる社会科授業の創造－

本研究は、「明治スタンダード」として、子どもの学力と教師の授業力を掲げ、意図的な問題解決的な学習を通して、思考力・判断力・表現力の育成を目指しています。

これを実現するための手立てとして、思考・判断・表現の類型化が挙げられます。

「思考をうながす5つのツール」として「予測」、「比較」など思考の型を、「6の判断力」として「優劣を付ける」、「価値判断」など判断の型を、「20の表現力」として、「話し合い」、「新聞」など表現の型をそれぞれ設定しています。



さらに、問いについても、「なぜ」、「どのような」など5つの類型化をしています。

これらは、思考・判断・表現の型、スキルと考えることができます。教材の内容や学習のねらいに即して、思考・判断・表現の仕方を選択し、それぞれの活動を意図的に仕組むことが可能になります。と同時に、これらは、見方・考え方を技能として身に付けることが望めます。

本研究について、指導講評された国土館大学 北俊夫先生は、次の2点について評価されました。

一つ目は、問題解決的な学習を積み上げることによって、目に見えにくい学力である思考力・判断力・表現力をどう付けるかに挑戦していることです。



二つ目は、学習の場面として、事実認識の場面とそれに基づく思考・判断・表現する場面を設定し、実際に、思考・判断・表現の活動を行うことによって、それらの能力をシンキングスキルとして育てようとしていることです。



### 2 授業の実際

今回は、5、6年の授業を参観しました。

5年の「情報産業とわたしたちの暮らし」は、メディアとして、身近な新聞と「石巻日日新聞」を取り上げ、メディアの役割・必要性和情報の意味を問う授業でした。

6年「歴史を学ぶ意味」は、これまでの歴史学習に登場した人物を比較しながら、歴史を学ぶ意味を考える授業でした。

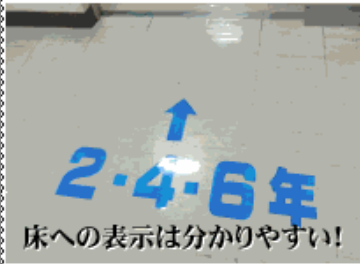
これらの授業では、子どもの活発な思考活動が展開されていたことが特徴的でした。一つ一つの発言に対して、「ふーん。」と全員が反応するのは、どうかと思いましたが、発言された意見に質問したり、続きを話したり、他と関連させたり、反論したりを子ども自身の手で行い、全体の思考を深めていました。このためには、一つ一つの意見を深めたり、広げたりするために、ここで何を言えばいいのかを考える力と習慣を育ててい

く必要があると思います。

もう一つは、多くの言葉で豊かに表現することができていたことです。一つの問いから分かったことをそれぞれの子どもが解釈したり、その上で意味付けたりしたことを様々な言葉で伝え合っていました。このためには、教師が多くの言葉を的確に示したり、使ったりしながら身に付けられるようにすることが必要だと思います。



### 3 ヒントになるかも！ 掲示・整備



校内、教室に、ヒントになりそうな整備がいくつかなされていました。これから、アイデアを出し合って、整備を整えたいです。



### 総括「白島スタンダード」を目指して

各会場に近づくと、祭りのような華やかさと活気を感じました。一方、先生方からも子どもたちからも、緊張感を感じることはありませんでした。普段のその学校らしい姿を発信しようとされている、これが地に足の付いた教育活動なのでしょう。

今回感じたことは、次の2点です。

1点目は、問題解決的な学習のあり方です。社会科の学習だけでなく、すべての教科・領域で重視されて、久しくなりました。しかし、どう仕組みかに目が向けられなかったために、学習問題を立て、ただ、その答えを見つける授業になってしまうことが多いのではないのでしょうか。問題解決とは、目的や内容ではなく、あくまでも、方法(原理)なのです。考える力を育てるために、どんな問いを



どう考えさせるのかに目を向け、思考活動を仕組んでいくことが大切なのではないでしょうか。これは、本校の取り組んでいる問いと思考の仕方の設定とつながっています。

二つ目は、子どもの育ちです。明治小学校の子どものよさは、真剣に学ぶ姿勢を持ち、思いをじっくりと語り合えるところだと思いました。心をつなぐ仲間づくりを土台に、じっくりと幅広く考える力、思いを豊かに伝える力が育っているからこそ、子どもの主体的な学びが展開できるのだと思います。

このためには、教師一人一人が目指す学びと子ども像をしっかりと持ち、子どもを高めていく日々の取組が必要だと思います。こんなものだ、これだけしておけばいいとせず、子どもにも我々の授業にも、少し高い目標を設定し、よりよい学び・成長への挑戦が必要なのではないでしょうか。

「明治小学校の授業づくり・子どもの育成のものは、『明治スタンダード』の全職員



による共有化であり、ここまで進んでくるのに、5年かかりました。」と研究主任の先生がおっしゃっていました。目指す学びと子ども像、授業づくりのスタンスを学校全体で共有化し、どの学年、学級でも、温度差なく展開されることが必要なのです。

広島大会まで、あと2年あります。「白島スタンダード」をともに目指しましょう。